

ワンポイント・ブックレビュー

石川晃弘・白石利政編著『国際比較からみた日本の職場と労働生活』学文社，2005年



本書は、1980年代半ばから2000年にかけて、3回にわたって実施された電機産業で働く労働者意識の国際共同調査の結果を、日本の現在の問題意識にひきつけてそのデータを再分析し、日本の各界に向けてこの調査からのメッセージを發しようとして編まれたもので、労働生活の諸相、格差と平等、上司・組合・労働者の3部から構成されている。各国の労働者意識の異同を知り、相互理解と連帯を考えるうえで必読の一冊である。

電機産業で働く労働者意識の第1回・国際共同調査（1984年 - 85年）は電機労連（現電機連合）のイニシアティブで実施された。そのきっかけになったのは、日本の場合は1960年代の後半から積み重ねてきた組合員意識調査が10回目を迎えるにあたって日本の電機労働者の意識や価値観の特徴を国際的視野のもとで明らかにしたいというものであり、東西ヨーロッパ諸国からの参加者の関心はスタグフレーションや失業問題、労使紛争多発下で悩まされているなかで日本は国民経済が着実に伸び良好な労使関係を築いているようだがそこで働いている人たちの意識や価値観はどのようなものなのか、それを知りたい、というものであった。

その後、10年経って第2回目（1994年 - 96年）、さらに5年経って第3回目（1999年 - 2001年）の調査が実施されている。労働者の意識からみた労働生活の質に関して膨大な情報を蓄積した。労働組合が主宰したこのような国際調査は、世界でおそらくこれが唯一のものと思われる。

調査の結果はさまざまな意義ある事実を明らかにし、通説を覆すような発見をもたらして各界から注目をあびた。そして、国際的にみて日本の労働者の企業帰属意識は決して高いとはいえないこと、職務満足の度合いはむしろ低いこと、組合参加は高い水準に位置することなど、諸外国との比較により通説とは異なるわが国の労働者像が描き直された。

本書は、日本の現在の問題意識にひきつけてデータを再分析し、事実の背後にある意識の特質の究明を図り、つぎのような章立てをもって、日本の各界へ向けてメッセージを發している。

- 第1章 職場生活の満足感とその構造
- 第2章 定着意識と転職意思 西欧・東欧・東亜比較
- 第3章 日本的労働生活の陰影 フィンランドと比較してー
- 第4章 社会的格差と平等観の変化
- 第5章 賃金の差を決めるもの
- 第6章 職場におけるジェンダー問題 性別職務分離の実態とジェンダーの再編
- 第7章 職場における上司の機能
- 第8章 職場の組合役員 そのプロフィールー
- 第9章 東アジアの労働者と労働組合 組合帰属意識の日中韓比較
- 第10章 労使関係の2類型とその変容 「二重帰属意識」をめぐる国際比較

また現在、各国の参加者による3冊目の英文刊行物（Akihiro Ishikawa, Chris Warhurst and Csaba Mako (eds,) Work and Employee Representation: An Internal Study of Electronics and Electronic Industry, Chuo University Press）が11月に刊行される。関心のある方はこちらにも目を通していただきたい（T・S）。